

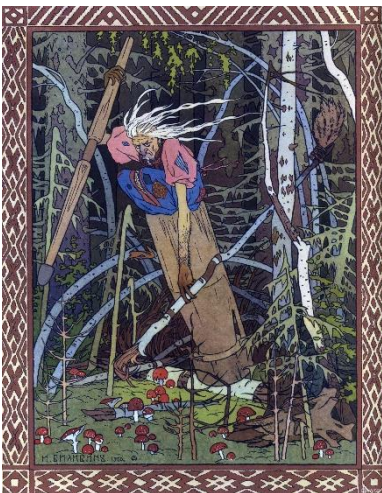
## 『うるわしのワシリーサ』

むかしむかし、ある村に商人が妻と二人で住んでいました。長く暮らしていましたが、なかなか子供が生まれず、悲しんでいました。やがて、幸せなことに娘が生まれました。名前はワシリーサ。かわいくて、素直な子でした。しかし、ワシリーサが8歳の時に母親が病気で死んでしまいました。母親は亡くなる前にワシリーサに人形を渡して、困った時には人形に食事を与えて相談するように言いました。



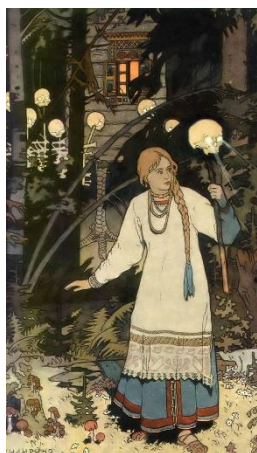
時間が経って、妻を亡くした商人は再婚しました。新しい妻には娘が2人いました。三人とも意地の悪い女で、ワシリーサに憎しみをもっていました。継母はワシリーサに仕事をいっぱい押し付けて、朝から晩まで働かせていました。しかし、ワシリーサが人形に食事をあげて、助けをたのむと、人形がすべての仕事をやってくれました。年が経つにつれ、ワシリーサはどんどん美しくなって、すばらしい女性に育ちました。継母と義姉妹は以前よりもっとワシリーサを嫌いました。

ある日、商人が長い旅に出かけました。継母は家を売って森の近くの家へ引っ越しました。この深い森の中には、おそろしい「バーバ・ヤーガ」が住んでいました。ある夜、継母は娘たちにそれぞれ仕事を与えるとロウソク1本だけを残して家中の灯を消しました。継母の娘はそのロウソクの火をわざと消して、ワシリーサにバーバ・ヤーガから灯をもらってくるように言いつけました。ワシリーサが人形に相談すると、人形は行っても大丈夫だと答えました。ワシリーサがバーバ・ヤーガのところへ向かっている途中、真っ白な騎士が通り過ぎると夜が明け、真っ赤な騎士が通り過ぎると太陽が昇りました。バーバ・ヤーガの小屋は鶏の脚の上に立っていて、周りを囲む柵は人間の骨でできていました。そこに真っ黒な騎士が通り過ぎると夜が訪れ、頭蓋骨の眼に明かりが灯りました。



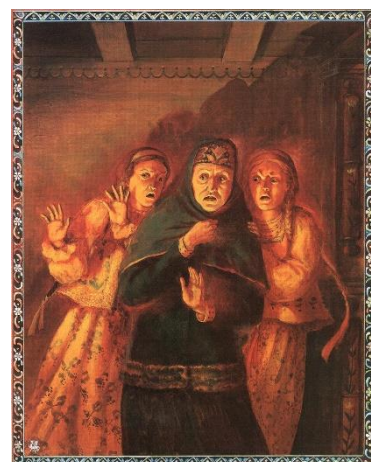
ワシリーサはおびえていましたが、勇気を出して、小屋に入りました。バーバ・ヤーガはペチカ（暖炉）に寝ていて、片方の足は窓に踏ん張って、もう片方の足はドアに突っ張っていて、鼻が天井にくっ付いています。ドキドキしながら、ワシリーサはバーバ・ヤーガに願いを伝えました。バーバ・ヤーガは自分のもとでしっかり働けば灯を渡すが、そうでなければ食べてしまうとしました。最初の日の仕事は、小屋と庭の掃除をし、夕食の準備をし、小麦の中から他の穀物を取り除くことでした。バーバ・ヤーガが出かけると白い騎士と赤い騎士が通り過ぎて行きました。仕事は人形がほとんど片づけてくれたので、ワシリーサは夕食の支度をするだけで

済みました。黒い騎士が通り過ぎるとバーバ・ヤーガが帰ってきました。バーバ・ヤーガは料理を普通の人のお3倍ぐらいたくさん食べ、ワシリーサには薄いスープと、一切れのパン、少しの肉しかあげませんでした。次の日の仕事にはケシの実から土を掃うことが加えられました。その日も料理の他は人形が仕事を片付けてくれました。



食卓でワシリーサが黙っているとバーバ・ヤーガが何か話せと言いました。ワシリーサが3人の騎士について尋ねました。白い騎士は朝、赤い騎士は昼、黒い騎士は夜だとバーバ・ヤーガが教えてくれました。バーバ・ヤーガがワシリーサになぜ仕事をこんなに早くできたのか聞くと、ワシリーサは母親の祝福があったからだと答えました。それを聞くとバーバ・ヤーガは目を光らせて、「家へ帰りなさい」と言いました。お別れにバーバ・ヤーガはワシリーサに頭蓋骨を渡しました。

ワシリーサが家へ帰って来ると、継母と娘たちはワシリーサを喜んで迎えました。ワシリーサが家を出て行った時から、家の中で火を灯そうとしてもダメだったからです。ワシリーサが持ってきた頭蓋骨の明かりであれば消えないだろうと思って、家に持って入らせました。しかし頭蓋骨の目から光が出て、継母と娘たちを焼き、三人を燃やし尽くしてしまいました。



ワシリーサはおばあさんの家に泊めてもらい、布を織り上げる仕事をして、静かに暮らしていましたが、ある日、その布が王様の目にとまりました。その素晴らしさから王様に気に入られ、ワシリーサは王様と結婚しました。旅から帰った父親も迎えてワシリーサは、幸せに暮らしました。

